

# 寺沢 迢 コレクション

—日本産植物標本図録—

2011 年

兵庫県立人と自然の博物館

## 目 次

寺沢 遼コレクションについて	.....	1
図録		
シダ植物	.....	4
種子植物		
裸子植物	.....	8
被子植物双子葉植物離弁花類	.....	9
双子葉植物合弁花類	.....	55
単子葉植物	.....	91
種名索引		
和名索引	.....	115
学名索引	.....	118

## 寺沢 迢（はるか）コレクションについて

植物標本は、ある時期その場所に確かにその植物が生育していたことを証明する大切な資料である。植物名の正確な同定のためには、花や果実などがついている植物体を採集して、その部分が調べやすいように葉の重なりや、枝先の向きなどを調整して台紙に貼り付けた植物標本が欠かせない。標本の数がたくさんあっても、花や実が不完全な標本ではしばしば同定が困難になり、あいまいなまま確定できないことがある。寺沢コレクションはこの点でたいへん優れた標本である。花や実のついた植物体が採集され、それらはきちんと表に出して貼り付けられている。そして正確に同定されたラベルが添付されている。

寺沢 迢氏は、灘中学校・灘高等学校から1950年に京都大学農学部に入學、1954年同学部農林生物学科卒業後、同年4月から兵庫県立社高等学校生物科教諭として3年間勤務され、1957年から灘高等学校生物科教諭として1999年に同校を退職されるまで長年勤務された。寺沢コレクションは440点余りの植物標本からなり、採集の年代別に見ると、1948-49年ごろの六甲・摩耶山での頻繁な採集に始まり、1950年には京都市内、1951-53年には妙高山系や尾瀬、1954-56年には兵庫県滝野町や社町の標本が少しと、南アルプス、白山などでの採集標本が含まれている。本コレクションの優れた点は、正確な同定ができる標本としての価値や、今では入手困難な高山植物標本としての希少価値だけでなく、たとえば六甲・摩耶山におけるラン科植物の標本などは、六甲山地域だけでなく兵庫県下でのそれら絶滅危惧種の分布情報を明確にする証拠標本として高い価値を有している。

寺沢氏は灘高校、京都大学の学生時代から、社高校、灘高校での勤務へと動かれても、時々の状況にあわせて植物採集を続けてこられた。標本は長年ご自宅で保管されていたが、灘高生物研究部の同期生だった近藤浩文氏（故人）や、京都大学農学部の同期生だった阪本寧男氏（京都大学名誉教授）の勧めにより、2003年に当館に寄贈いただいた。標本は現在、当館植物標本庫（HYO）に収蔵され、学術的な利用に供されている。この度、これら標本の画像データ化が完了したので、植物専門研究者以外にも利用可能なように図録（画像付き標本目録）として出版することとした。

寺沢氏が植物標本を作るようになった経緯や、植物採集に関する当時の状況について紹介しよう。寺沢氏は子どものころ神戸・摩耶山のすぐ南に住み、摩耶山はホームグラウンドのように毎週登っていたが、灘中学校に入學後、生物研究部に入り、当時の顧問だった川崎正（正悦）先生の指導を受けて植物好きに火がついたとのこと。同じ生物研究部で同級の近藤浩文氏とよく六甲山や摩耶山に採集に出かけたという。当時の摩耶山には、天上寺（1976年火災で焼失、その後場所を移して再建された）周辺に多くの希少植物があったようで、寺沢氏は手紙の中で次のように記されている。

『摩耶山の天上寺（もちろん火災消失以前の）の南東斜面の常緑樹林は、いまでは荒れ果てていますが、以前は「学術研究保護林」に指定されていて多くの希少植物があった所

です。猛烈な台風（ジェーン台風だったか、伊勢湾台風だったか忘れてしまいましたが）で多数の古木が倒れて大きな被害が出ました。たまたまその直後に行ったとき、倒木の幹にムギラン、ヨウラクランなどの着生蘭が着いているのを発見して大喜びで採集したこともありましたが。その当時と今とを比べると植物の種類が減って単調化してしまったことに改めて驚かされます。とくにウチョウラン、イワヒバ、カキノハグサ、キンラン、ギンラン、カキラン、マツムシソウ、オキナグサなどは今ではもう絶滅したのではないかとさえ思われますが、これらは単純な自然破壊による植生の変化だけではなく、いわゆる「山草マニア」による乱獲が主な原因だろうと考えています。』

寺沢氏や近藤氏が植物採集された当時のようすが目に浮かぶようであり、また寺沢氏の植物に対する熱い思いも感じられる。

京都大学在学中は、農学部の学生ではあったが理学部植物学教室の北村四郎先生や田川基二先生の指導を受け、同級生の阪本寧男氏とよく登山をして植物採集をしたとのこと。コレクションには、今では採集が難しい尾瀬や妙高山、白山、南アルプスなど国立公園の山岳地の植物が多数含まれているが、これらの標本の採集許可証入手に関する当時の状況について、次のように記されている。

『当時の採集許可証は所轄の営林署に書類を提出して発行してもらっていました。北アルプスについては、逆立ちしてもそんなものは出してくれるはずもないので最初からあきらめて、比較的規制の緩い南アルプスに的を絞りました。所轄の営林署をどうやって調べるかとか、書類の書き方などについては、当時の京大理学部の北村四郎先生に相談しました。採集者の資格は「学術研究者」ということですが、理科系の植物に関係のある大学ならただの学生にでも出してもらえたので、自然保護に厳しい今の時代から思えばウソのような話です。』

コレクションの採集年をみると、ほとんどが自然公園法の施行前なので制限はゆるかったのかもしれない。しかし、採集場所の多くは当時すでに国立公園だったので、知恵を絞りながら正式な採集許可証をきちんと取り、何日もかけて登山するなど、同氏の植物採集にかける熱い思いや、精力的・意欲的な活動がなければ、この貴重な標本類がコレクションとして残らなかったのではないかと改めて思う。

今回、図録の形で刊行するこの『寺沢 迢コレクションー日本産植物標本図録ー』により、当館所蔵の植物標本そのものや標本のもつ情報が、より多くの人目に触れ、有効に活用されることを期待する。

2011年3月 編集者